

沖

10
2023

巻号雜誌(10号)



川あかり

能村 研三

いのちの理由

この町の祭 濟みたる川あかり

しんがりの雲 退けて梅雨上る

熱きもの食べて 暑き日終りけり

真清水の掌上に 切る豆腐かな

足組むはさびしき形 晩夏光

ひと仕事遅れし 田あり稲の花

爽節や江戸川 越えて変る風

遠きほど思ひ深まる 花火かな

口惜しきことや 白桃かぶりつく

耳打ちの大きすぎたる 生身魂

先日、市川市文化会館で行われたさだまさしさんのコンサートを聞きにいった。さだまさしさんは、俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進に向けて、俳句を愛する一人として応援メッセージを寄せていただいたご縁で、何回かコンサートに行かせてもらっている。さだまさしさんは、長崎から上京され小学生の時から市川に住まわれた。市川を故郷のように親しまれ、ほぼ毎年、コンサートを開かれている。十数年前、私が文化会館の館長であった頃にも何度もお会いしたが、会回も直接ご挨拶出来た。

折々にはさむトークも絶妙で、市川の新田に住んでおられた頃の話などは私には身近に感じることが出来た。

今回はアーティスト活動50周年記念ということで、お馴染みの「精霊流し」「無縁坂」から始まったが、ファイナー

レ近くの「風に立つライオン」あたりはことに盛り上がった。

中でも、浄土宗法然上人の八百年大遠忌を記念して制作された「いのちの理由」という曲に心打たれるものがあった。

「私が生まれてきた訳は父と母とに出会うため私が生まれてきた訳はきょうだいたちに出会うため私が生まれてきた訳は友達みんなに出会うため私が生まれてきた訳は愛しいあなたに出会うため」という歌詞で、さらには「私が生まれてきた訳は何処かの誰かを傷つけて私が生まれてきた訳は何処かの誰かに傷ついて私が生まれてきた訳は何処かの誰かに救われて私が生まれてきた訳は何処かの誰かを救うため」と、単なる綺麗ごとだけでは終わらない人間関係が歌われていて、私とほぼ同年代のさだまさしさんの考え方に感動させられた。

慰霊碑へただ一本の灼くる道

背負はざるものにも重き原爆忌

ひぐらしのひと日の地熱治めけり

山毛櫟大樹伐れば残暑の水を吐く

親子で釣る魚籠に親子のやうな鯨

きちかうの藍を奪へる夜の帳

落鮎のあえかなる朱を愛しめり

雁という鳥は、季語に哀話的な「雁風呂」とか「雁供養」があるように人の心に添いやすい。子供の頃は夕方に群れて飛ぶ景をよく見たもので、「棹になれ、棹になれ」とか「鉤になれ、鉤になれ」と声を掛けると、驚いて群れの列が一例になったり鉤の形になったりしたものであった。登四郎先生に「雁行と行く手同じく美濃に入る」という御句がある。やはり「おう、雁がゆく」としばらく見とれていたに違いない。

偶々「馬酔木」の同人句評を頼まれて読んでみると、根岸善雄さんの句に「帰りゆく雁を仰げる一羽あり」があった。根岸さんとは沖同人であった堀口希望「出航」編集長が大学の同期ということでご縁を頂き、秋櫻子先生や登四郎先生の話を知った。その根岸さんが昨年亡くなられる前に詠まれた句と思えば、「仰げる一羽」に込められたお心がしみじみと感じられるのである。

濤声集

水を飲む

千田百里

向日葵の迷路や何故か油脂匂ふ
オン・ザ・ロック揺らしつ夏を見送りぬ

*八月は日本の忌や水を飲む
六人兄弟四人は茄子の馬上かな
コスモスの何と空気の読み上手
破芭蕉韻文崩すなくづすなよ

窪みけり

辻美奈子

*砂時計未来涼しく窪みけり
濡れてゐるやうに乾きて蛇の衣
空蟬に閉ざす昔のありにけり
蟬の死のすべてきちんと畳みある
雷鳴の詰まるブリキの戦車かな
燦然と邪馬台国の天の川

蒼茫集

夫の留守

菊地光子

* 白桃のするする剥けて夫の留守
糸のころの軽さは風のかろさとも
鳳仙花われるや音の出る絵本
梅雨深し空也聖のあばら骨
家々の影の重なり水を打つ
水飛沫しやきしやき夏を折り畳む

蓮の放下

頓所友枝

* 葉脈の始点に揺らぐ蓮の露
四日目の蓮の放下か風待てり
向日葵の覗いてぬたる駐在所
ラッセラーと跳ねてみちのく祭酔
許さうと決めかき氷崩しけり
魚ななこ子紋角の綺羅なす江戸切子

十字架の幅

荒井千佐代

潮騒や柔らかく煮る盆のもの
庭木みな大樹となれり今日の月
乳足りて赤子重たし曼珠沙華
桔梗や胸乳押さへて帯を結ひ
亡き父を訪うて人来し蝨斯
* 主の胴は十字架の幅秋気澄む

向かう側

栗原公子

* 思ひ出はみな夕焼の向かう側
大夕立気付け葉のやうに浴ぶ
向日葵や後ろ姿の無防備な
婚の荷に足す黴の香の母子手帳
幾千里翔け来て静か茄子の馬
留守電の声消さずおく夏の果

飛鷹選評



能村 研三

あの恋に余説の有りぬ走馬灯

山中 洋子

走馬灯の前で親しい人達と語らっている。幸せに暮らしている今、別に昔のことなどどうでもよいのかも知れないが、恋に燃えていた時代、周囲の人は見守るしかなかった。紆余曲折を経た恋もあったのだろう。走馬灯をただ見つめるがごとく、昔の話となってしまう。

退院や鰻は食べていいですか

佐々木 茂

退院する際に、担当医から今後の生活について話を伺う。何でも相談にのってくれる気さくな先生なのだろう。土用も近く好物の鰻を食べてもよいかは作者にとつては大変なこと。この質問の答えは俳句に詠まれていないが、おそらくOKであったのだろう。こうした普段の会話が口語表現で詠まれることがあるが、これがパターン化することも注意しなくてはいけない。

街道のいまは抜け道青田波

長山 正子

近代になり江戸の情緒を残す街道に、次々にバイパスが開通した。昔からの街道は寂れてしまい青田波がそよぐ田んぼの中を通り抜ける抜け道になってしまった。

葉は葉の色に半眼の雨蛙

吉村さよ子

雨蛙は周囲の色に合わせて体色を変化させる。茶色い地面に居る時は暗い色だが、葉の上に居る時はくっきりした黄緑色をしている。作者は雨蛙の半眼を見ながら雨蛙の敵から守る本能に驚かされたのである。

産土の神のうねりや神輿発つ

古谷由紀子

神輿は神様が乗るものであることから、神輿自体が神社の形をしたものが多く、屋根の上には鳳凰や擬宝珠が飾られている。神様がいらつしやる祭壇を担いで移動するものとされ、神社の神輿庫から神のうねりのように威勢よく出発をした。

本当の別れは一度桐一葉

神尾 芳秀

人生の中で何度も経験する出会いと別れ。別れにはいろいろな形がある。別れても機会があればまた会える形もあるが、やはり本当の別れというものは「死」という永遠の別れなのである。季語の桐一葉は衰退の兆しを暗示させる。

炎天下ハシビロコウの哲学ぶり

頓所 敏雄

かつて千葉動物公園を吟行した時に、ハシビロコウに初めて出会ったことがある。ハシビロコウは群れをつくらず単独行動を好む。動くとき魚が警戒して逃げてしまうので、魚に見つからないようにするために動かないで待つているとも言われている。まさに寡黙な哲学者のようなかまえである。

水茎の余白涼しき母の文

竹田 絹子

久しぶりに文箱から懐かしい母の文を取り出して見る機会があった。母の字を改めてみると達筆で余白の取り方もうまかった。母の涼やかな筆使いを今に感じ、清々しい気分になった。

聞く耳 七田文子

岩肌を布織るやうに女滝かな
爪先に木洩れ日揺るる籐寝椅子
* 聞く耳を無くすためなりサンガラス
かき氷しやかしやか余生忙しき
夜涼かな発着の灯を目で追うて

忘れたきこと 鈴木基之

* 忘れたきことは忘れぬ走馬燈
振り返りまた振りにけり夏帽子
八月の木霊の深し樵の森
秋風や砂丘の傷をいやしをり
新涼の重低音の読経かな

渦巻く 浜田はるみ

* 飛込みの十秒青春の火花
大暑大安婚姻の届け出す
降りそそぐ蟬の声明爆心地
アルプスの水引く町や灯の涼し
蚊遣香けふの終りの渦巻きぬ

踊り 兵藤 恵

携帯の熱持つてをり踊りけり
* ピーマンの何を詰めんと空けてあり
真つ直ぐな瞳に会ひぬねぶたの夜
過ぎゆけるものみな青し走馬燈
送り火や山に熱れの残りたる

風 鈴 中村重幸

万人に万の生死や蟬の穴
三伏や小さき石にも硬き影
* 風鈴の工房にして熱地獄
まだ息をしてゐるトマト齧りけり
オホーツクの夕焼に置く旅靴

飛び込み 阿部眞佐朗

地卵を割つて搔つ込む河鹿宿
妖艶に刑場跡の夾竹桃
オムレツぶるん巴里祭の朝餉かな
* 飛び込みの余白赦さぬ穿ちかな
新涼やあうらに馴染む畳の目

葉擦れ 荒井千瑳子

風の道すばやく描く青田かな
* 星流る偲ぶにかなふ美しき距離
覚えなき癒青々と残暑かな
力溜むる仁王の左手初あらし
黍畑の葉ずれ遥かなものを呼び

潮鳴り 富川明子

* 潮鳴りや夏は少年男にす
琴線に触るるひとこと鉄風鈴
生きものへ炎帝の威の赫赫と
黙禱へ声慎めり油蟬
令和の世行き交ふ携帯扇風機

足裏の砂 菅原健一

夏の山大繩とびの輪に入れむ
夕映えは川に流れて夏の果
空蟬の空を抱へて透きとほる
爪染めて少しく拗ねて鳳仙花
* 秋涼し足裏の砂を海が引く

時越えて 本池美佐子

時越えて広間涼しき陣屋跡
青蜥蜴徹頭徹尾無表情
佞武多の灯天地の闇を鷲掴み
穴惑ひ行方知れずのスペアキー
* 三面鏡に憂ひの角度秋ともし

沖作品



能村研三選

神奈川

山中 洋子

石棺に貝の痕跡炎天下

吉村さよ子

暫くは形を愛でてさくらんぼ
虹つくるホースの先の子供達

「んだんだ」と友の教への海鞘捌き
嬰兒の朱の足形や風薫る

*あの恋に余説の有りぬ走馬灯
豪快に天蹴散らかすはたた神

*葉は葉の色に半眼の雨蛙
西瓜食む履歴書に記す特技なし

市川

佐々木 茂

古谷由紀子

自転車を停めて父子の遠花火
墨東の工場育ちや江戸切子

炎帝に問ふ満身の置き所
半夏生明星の空冷めやらす

*退院や鰻は食べていいですか
遠花火患者の集ふ窓のあり

*産土の神のうねりや神輿発つ
門ごとにほほづき灯る抜小路

千葉

長山正子

神尾 芳秀

*街道のいまは抜け道青田波
言ひかけて言葉呑み込む冷奴
代役の手に汗握る名演技
会釈して譲り合ふ路地白日傘
神の使ひか社殿の前の黒揚羽

*本当の別れは一度桐一葉
古里は心の寄辺 鱗雲
余生にも未来ありけり秋夕焼